

欧州に迫る「平和党」と「正義党」の選択

Financial Times
APRIL 23 2022

Opinion Geopolitics

To isolate Russia is not in the west's power or interest

Treating the entire country as a geopolitical Chernobyl
would be a strategic blunder

IVAN KRASDEV

ロシアを孤立させることは、西側のためにならない

ロシアの地政学的チェルノブイリ化は誤りである

開戦の責任者は誰なのか 蔓延する「ロシア人総犯人説」

世界がロシアのウクライナ侵攻の衝撃のあと立ち上がったとき、一つの疑問が湧いてきた。それはまだ解消されていない。

その宣戦布告は誰の立場を代弁して実行されたのか？

大多数のロシア人は、プーチンの帝国主義の野望のための人質なのか。

それとも、ロシア社会はプーチンと一体化しているのだろうか？

侵攻当初は、ヨーロッパでは人質説に傾きいていた、ロシアの一般市民がプーチンの暴走に対して反対の声を上げると予想されていた。

しかし、プチャの残虐行為が明らかになると、世界は「プーチンの戦争ではなくロシアの戦争ではないか」ととらえ直すようになった。

いまや、クレムリンのメディア統制と弾圧の強化だけでは、ロシア社会の沈黙を正当化することはできない、それどころか説明することすらもできないと考えられるようになった。

「ロシア人はプチャの真実を知らないのか、それとも知ろうとしないのか」

多くのヨーロッパ人が、自国の軍隊の蛮行に目をつぶり、固く意見を飲み込んでいたロシア人の姿に憤慨した。

ロシアのすべてが「チェルノブイリ」（隔離された廃墟）に

1986年のチェルノブイリ原発事故の後、爆発した原子炉の周囲に立ち入り禁止区域が作られた。そこは疫病神の現場であり、危機にさらされた道徳の現場であり、石の棺により封鎖された悪徳の現場である。

そしていま、ヨーロッパ人によって、西側の政治家全般によって、ロシアは地政学的なチェルノブイリと指弾されている。

今日、多くのヨーロッパ人が、「ロシアのない世界」が実現することを夢見ている。その夢の中では、西側諸国はもはやロシアのエネルギー資源を利用することはない。文化的な交流は断ち切れ、ヨーロッパの国境は強化される。あたかもロシアが消滅したかのように。

病的に楽観的なビジネスリーダーでさえ、今後数年間、ロシア市場に再投資する機会はほとんどないだろうと見ている。

プーチンが権力を握っている間は、西側諸国の制裁が大幅に緩和されることはないだろう。西側の政策立案者の多くは、すでにロシアにおける変革の希望をあきらめている。その代わりに、彼らはロシアを石棺に封じ込め、ロシアの外交能力を抑え込もうとしている。

ロシアが交渉により成果を上げる能力を規制しようとし、そのための方策に焦点を合わせている。

しかし、ロシアを封じ込めようとする試みは、冷戦時代の西側の対ソ封じ込め政策とは全く異なるものである。

ケナンの封じ込め戦略との違い

ジョージ・ケナンが対ソ封じ込め戦略を考えた頃、それはソ連体制がいつか、その内部矛盾のために崩壊するという前提で行われた。

冷戦に関する西側の考えでは、ソ連社会は「悪の政権」と「抑圧された国民」から構成されており、体制は非難されるが国民は無罪とされた。ソ連は強制収容所のように描かれた。ソ連の指導者たちが社会の正当な代表者だと認識されることはなかった。

だから国民の立ち上がりによって、国政の「変革」が可能であると考えられた。

しかし今日のチェルノブイリ型の孤立策は、「ロシアは絶対に転換不能である」という前提のもとに設計されている。

これとは対照的に、「ロシアという孤立地帯」を作ろうとする政策は、ロシアの不変性を念頭に置く。そしてロシアをゲッターのようにみなすのである。

排除型封じ込め施策の3つの誤り

ロシアを地政学的なチェルノブイリとしてゲッター化すべき理由は、道徳的には無数にある。

しかし、ロシアを無数のプーチンからなる集合体として扱うことは、戦略的な失策となる。

その理由はこうだ。

1. ロシアの指導者の安定化をもたらす

まず、この考え方は主にロシアの指導者を利することになる。それは結果として、彼らにロシア国民の代表としての正統性を与えてしまう。

さらに悪いことに、「西側が許容できる唯一のロシアは弱体化した敗者ではない」という、誤ったイメージを固定することになる。

ロシアが地政学的なチェルノブイリ（廃墟）であるなら、自由を愛するロシア人にとって唯一の合理的な選択は、出口に向かって逃げ出すことではかな

い。

2 . ロシア人への無関心をもたらす

第二に、ロシア孤立化戦略は、ロシア人という存在への関心も閉ざしてしまう。おそらくそれは自滅的であろう。それは、「ロシア人が戦争に反対する発言をしないことは、ロシアが戦争に対する態度を変えないからだ」と切り捨てることになる。

実際は、「ロシア人が戦争を支持するのは、プーチンを支持しているからではなく、戦争によって政権が変わるかも知れない」と漠然と思っているにすぎないのだが、その「適応」現象を見過ごすことになる。

反プーチン傾向の人々は、ウクライナでのロシア軍の敗北によってプーチンが倒れることを望んでいる。プーチンの支持者は、プーチンを取り巻く在外エリートがこれで破滅するのではないかと期待する。

有名なロック歌手の言葉を借りれば、西側がオリガルヒの財産を差し押さえた後、ロシア人はずいぶん「ロシア革命のときのように平等に」なったのだ。

3 . 非西側諸国はロシアを見捨てない

第三に、ロシア抜きの世界を実現することに賭けるのは無駄である。なぜなら、非西側諸国は、クレムリンの戦争を好まないかもしれないが、最終的にロシアを孤立させようとはまでは思っていないからである。

非欧米諸国は、クレムリンの戦争に好意的でないが、だからといってロシアを孤立させようとは思っていない。

多くの人々は現在の蛮行を、うんざりするものではあるが、世界史の例外ではないと考えている。彼らは、西洋的価値観に縛られない現実主義を実践しているにすぎない。

ジョー・バイデン米国大統領が「民主主義のためのサミット」に招待した国家の多くは、ロシアに制裁を加えていない。

来るべき 2 つの党派の間の衝突

いまもドンバスでロシアの軍事攻勢が続けられている。

それは、まずもってロシアを道徳的に修復不可能なものに見なす人々と、世界政治における、不可避的なリアリティと見なす人々との間の衝突を、激化させている。

今後、ヨーロッパの世論は 2 つの党派の間の衝突となるだろう。

ひとつは、「**平和の党**」だ。平和党は西側が優先すべきは、できるだけ早く敵対行為を停止することだ」と考える。

そして「ウクライナの大幅な譲歩を代償にしてでも、一刻も早く敵対行為を止めるべきであり、それを西側の優先事項とするべきだ」と主張する。

もう一つは「**正義の党**」だ。こちらは「たとえ戦争が長期化したとしても、ウクライナ領内からロシア軍を追い出すことが大事だ」とかんがえる。

そして「戦いと勝利」を優先事項だと主張する。

これから、この二者択一を欧州世論は迫られることになる。

ヨーロッパの歴史において、平和と正義は韻を踏んでいない (Peace and justice do not rhyme in European history) 。

ウクライナへの侵攻を「プーチンの戦争」と呼ぶか、「ロシア人の戦争」と呼ぶかは、ヨーロッパの人々にとって重要な問題である。それは好みの問題ではない。それはヨーロッパにとっての戦略的な選択をふくんでいる。

それは、プーチン後のロシアとの関係において、西側の予感と受け止めを示すものである。たとえそれが到来するのがいつであろうとも...